

# ニートを通して浮き彫りにされる 自信なき大人社会の実像

学校にも職場にも属さず、職業訓練も受けていない若者たち「ニート(NEET, Not in Education, Employment or Training)」が増えている。彼らをどのように受け止めればいいのか。話題となった書籍『ニート:フリーターでもなく失業者でもなく』の著者である東京大学社会科学研究所助教授・玄田有史氏にうかがった。

## 誰もが個性的であるわけがない 誰もがオンリーワンではない

玄田先生は「ニート」をどのように捉えていらっしゃるでしょうか。また、なぜ彼らが増えているとお考えですか。

**玄田** 現在、若年者の失業やフリーターが、とかく社会問題視されています。ニートというのは、失業者にもフリーターにもなれない人のことで、最近とても増えています。なぜ増えてきたかという明確な理由は、私にもよく分かりません。もちろん、不況の影響は大きいでしょう。就職活動に備え、資格を取ったり英語の勉強をしたりして自分なりに努力をしても、なぜ落ちたのかという理由が分からないまま就職試験で落ちてしまう。それを繰り返すうちに、自分は社会から「必要ではない」と言われているような気がして職探しをあきらめ、失業者にすらなれなくなってしまう。失業者は職を探しても仕事がない者のことで、職探しにまで至らないニートとは違いがありますが、苦しくなってくると

失業状態を続けるのも大変なのでニートになっていく。そのような状況はあるでしょう。

ニートが増えた時代的背景についてはいかがお考えですか。

**玄田** 現代は「自分らしく生きる」とか「個性的であれ」とか「ナンバーワンではなくてオンリーワンになれ」など、個人が個として確立することが社会から求められるようになってきています。それは学校であつても家庭においても、また就職という局面であつても然りです。

以前、日本人は「画一的だ、金太郎飴だ」と揶揄され、個性をつぶす教育、個性をつぶす社会だと言われていました。それではいけないと、今度は「個」だ「自立」だ「専門性」だとなったわけです。それ自体は方向性としては決して間違つてはいませんし、非難されるべきものではありません。その中で、自分らしさを見付けようと雄々しい振り舞いをして自己実現をできる人はハッピーですが、実はみんながみんな、そんな特別な個性を持って

いるものではありません。むしろ、そのような個性や専門性を持たない人の方が多いのかもしれない。そのときに、そのような人を怠慢だと決め付けたり、切り捨てたりしてもよいのか。個として輝こうとしないのは、本当にいけないことなのか。そんなことは決してないはずで

そんな「誰もが個性的であれ」、「誰もがオンリーワンであれ」という社会のプレッシャーの中で息が詰まり、苦しくなってしまう人が出てくるのは、ある意味で当然のことです。

例えば、中には人付き合いが苦手な人もいるのに、「人付き合いは上手くやらないといけない」という社会からのプレッシャーが非常に強い。そこで苦しくなつて立ち止まる人が出てきても、それはその人の無気力や怠慢の問題ではない、ということです。そこで立ち止まってしまおう人がニートであり、それを否定したり、何かのレッテルを貼ったりしてしまうことは望ましくないだろうと思うのです。

「働く意欲のない若者」とか「若



者の就労意欲の欠如」というような表現を、一部マスコミなどではよく使っています。しかし実際はそうではない、と玄田先生は著書でも書かれています。

**玄田** 彼らは決して働く意欲が弱いではありません。むしろ意欲があり過ぎるため、働く意義などを考え過ぎて、働くことに希望を持てなくなっているのです。それ以前に、私は人の意欲が高い、低いと決め付けることに対して嫌悪感があります。何でも意欲の問題として片付けてしまえば楽ですから、そのように括りたくなりますが、そんな問題ではないのです。社会の変化やプレッシャーの中で、誰もが上手く振る舞えるわけではないし、それは本人の意欲や怠慢が原因でもない。しかもそれは現在、正社員として働いているような人であっても、いつ起こるか分からない問題です。誰だってニートと紙一重だし、ニートになるのに特別なきっかけがあるわけでもない。ひょんなことから誰もがニートになったりするのは、「個性」を求めるとはよいのですが、

残念ながら現在、それは個人の「個」ではなく、孤立の「孤」になってしまっている、と思うのです。

## 人生はまんざらでもない 親は子にしっかりと語れ

ニートに対して、どのようなことが必要とされているのでしょうか。

**玄田** まず一つは、ニートの問題をどこまで一人ひとりが自分の問題として受け止めることができるか、ということです。そしてもう一つは、いい意味での大人からの「おせっかい」です。「おせっかい」というのはネガティブな言葉ですが、いい意味での「おせっかい」というのもあると思うのです。われわれが成長していったり、何かを成し遂げたりするときに、自分自身の努力だけでそれをできることは極めて稀で、どこか外部からの働きかけによって気が付いたり、勇気付けられたりすることがほとんどです。ひょっとしたら、ニートというのはそういった外部との接触がうまくでき

ないまま青年期を迎えた人たちなのかもしれない。だから彼らは、そんな大人のちょっとしたおせっかいで、立ち直りのきっかけをつかめるかもしれないのです。

どのようなことをすれば、ニートにとっていい意味での「おせっかい」になるのでしょうか。

**玄田** 人によって立場や状況が違うので、具体的にどうということは言えないのですが、一番根本的なことは、大人が自分の人生に対するプライドを持つということではないでしょうか。これはニートに限ったことではないのですが、若者たちは、大人の本音を聞きたがっているのです。ところが、それを語ることでできない大人が圧倒的に多い。自分が経験してきたこと、働いてきたことに対するささやかな誇りを大人がきちんと語れなければ、子どもは「働くってまんざらでもないな」とは思えないでしょう。

親でも先生でもそうですが、「生きていくのはつまらない」、「仕事するのはつまらない」、「希望もない」と思っていれば、子

ども「つまらない」と思うに決まっています。「人生はしんどい、子どもの世話も面倒くさい、でも人生は悪

くない」とどこかで思えなければ、子どもは希望を持ってないのです。ニートの問題は、大人が自分の人生にプライドを持っているかどうかという疑問を、逆に投げかけているのです。

そう考えると、今後ニートはますます増加しそうに思いますが。

**玄田** 本当に必要なのは、職業についての情報や知識ではありません。実際に人と交わり、楽しみ、緊張し、そして「自分でも何とかなるんだ」と思える実体験を持つことです。それから、インターンシップを高校や大学で初めて体験するようでは遅すぎます。もっと早い時期に、そういった体験ができなければだめなのです。

## 地域の大人と子どもが緩やかにつながる そのために「14歳の挑戦」を広めたい

その具体案が、玄田先生が提唱されている「14歳の挑戦」であるわけですね。

**玄田** そうです。大人と子どものちょうど中間、最も多感な中学2年生に仕事を体験させるというものです。11月第2週の月曜から金曜の5日間、全国130万人の中学2年生すべてが、地域の職場で就業体験をする。彼らは、地域の大人と一緒に行動しながら、働くこととはどういうことかを自分のこととして感じることができるのです。

この「14歳の挑戦」を考えられた

きっかけは。

**玄田** 実際に中学生に5日以上の職場体験をさせているところがあるのかを調べてみたところ、それを実行している県がありました。兵庫県と富山県でした。

兵庫県では2002年度、すべての公立中学校360校で約5万人の中学2年生に職場体験をさせることで、学校から「地域に返す」運動が行われています。「なぜ兵庫県で」と思うでしょうが、その発端は、神戸市連続児童殺傷事件、いわゆる「酒鬼薔薇事件」で大人が特別な危機感を抱いたことを契機とするものでした。富山県では、そうした衝撃的なきっかけはありませんが、非常に教育に熱心な県で、高校進学率が全国で一番高いことが特徴です。

この二つの県での実績を見ますと、中学生はその5日間で実に多くのことを学んでいます。体験後は、不登校生徒の登校率が上昇することが、効果としてはつきりと現れています。

「11月」と時期を設定されているのには、何か意味があるのでしょうか。

**玄田** 学校関係者の間では、中学2年生について「11月危機」という言葉があるそうです。10月までに運動会や学園祭などが終わり、12月から期末試験、そして受験モードに一気に突入していく。その狭間の11月はいろいろな事件が起こりやすい時期だということです。

実現のためには、どのようなことが必要でしょうか。

**玄田** これを実現するには、彼らを受け入れる事業所の協力が不可欠です。現存する事業所のわずか5%が、子どもた

ちの将来に責任を感じて受け入れてくれればよいのです。「やってやる」という大人の熱意に期待したいと思います。逆にそのような心ある会社が5%すらないのだとすれば、日本の社会に未来などないと言えるでしょう。地域の中で、親と先生以外の大人と緩やかにつながることができる、そのような機会づくりの「おせっかい」が、この「14歳の挑戦」なのです。

## ニートはすぐには解決しない問題 学校教育も地域の協力を仰ぐべき

ニート支援の現状について、先生はどのようにご覧になりますか。

**玄田** いくつかのNPOがニートと共に生活して、1カ月かかるのか1年なのか分からないままに頑張っています。NPOは概して運営のための資金繰りが困難ですから、場合によってはNPOの方たちは自分でローンを組んで、仮称「ニートハウス」をつくり、そこで生活しているのです。ニートの問題は、同じ年代の若者がこうして一緒に自分の問題として関わられなければ解決できないと思います。それを大人がどれだけ支えてあげられるか。そこが大切なのです。

NPOだけではありません。学校の果たす役割も重要です。学校の先生を批判するのは結構ですが、批判したらそれと同じくらい応援してほしい。また、先生よりも偏差値の高い学校を出ている親がたくさんおり、彼らが露骨に先生を馬鹿にする。それは絶対に止めていただきたい。もし子どもの前でそれをやると、子どもが先生を馬鹿にするようになってしまいます。



一方で、学校の先生方は社会と向き合った経験が少ないので、社会が怖いのです。これからニートを支えていくためには地域の力が不可欠ですから、地域の大人たちも批判するだけではなく、先生に協力していく姿勢が必要でしょう。先生も、問題を学校や自分の中だけに抱え込まないで、地域に協力を仰げばよいのです。地域には教育力のある人たちがたくさんいますから、そのような人たちの手を借りればよいですし、先生からも「助けてほしい」ときちんとお願ひすればよいのです。最初はいろいろ大変かもしれませんが、長い目で見れば先生も楽になれます。

国の支援策についてはどのようにお考えですか。

**玄田** 行政も若者の自立支援ということではいろいろな取り組みをされていますし、これから動き出す試みもあります。それは私も応援はしますが、勘違いしてはいけないのは、だからといってニートの問題はすぐに解決には向かわないということです。ある程度の開き直りと、しかしあきらめられないという粘り強さが必要です。

例えば、これから世の中の景気が回復して、雇用環境が改善されてくれば、ニートの数は減るかも知れません。しかし、ゼロになることはない。それより、そんな世の中でニートを続けていれば、今以上に苦しい立場に立たされます。「就職できるのに怠けている」と見られてしまいますから。

ニートの問題は、とにかく労働力不足とか、将来の年金制度の維持のために解決が必要と言われがちです。

**玄田** 確かにニートが増えれば労働力は減るし、社会福祉財政の悪化にもつながるでしょう。もっと極端に言えば、ニートが増えれば生活保護受給者が増えます。本人は働かない、親は十分な財産を残せないということになれば、50歳になって急に働けと言っても無理ですから、必ず生活保護を受けなければならなくなる。生活保護を受けるというのに開き直るのは間違っていますが、それでも生活保護を受けざるを得ない人がいるということも認めなければならない。

ただ、私はそんなことのためにニートの問題を解決しなければいけないと言ったことは一度もありません。私が主張しているのは、ニートは現状の自分ではないとは思っていないし、働きたいとも思っているのに、自分の力だけではそれができない。だから大人の「おせっかい」や他人からの適度な動機付けが必要だということです。

## 「わけの分からないもの」に対する タフネスさが足りない世の中

いわゆる「個性重視」の教育は、今後どのように方向修正すればいいのでしょうか。

**玄田** これは制度の問題ではなくて、もっと個人的な資質の問題です。簡単に言えば、よい先生を増やすしかありません。

教育というのは、最近とはかく分かりやすさが求められますが、それは違います。もっと「わけの分からないもの」としてやらなければならない。勉強はわけが分からないからこそやる意味がある。すべて

分かってしまう子どもは勉強しなくてもよいのです。そのようなことを理解した先生が、一所懸命に教えなければいけない。わけの分からないものの代表が勉強であり、恋愛であり、古典に触れることです。また、音楽や絵画などに触れることも大事なのです。

巷には、いわゆるマニュアル本の類が溢れています。

**玄田** いかにか社会が自信を失っているかということの証でしょう。今社会に本当に必要なのは、分からないことに直面したときに、それを乗り越えていけるタフネスさなのかもしれません。人を育てるといことは、極論すれば騙すことです。それで教わる方は「おかしいなあ」と思い、自分で考えて成長していく。そこが大切なのです。

ニートの研究者がニートをいくら切り刻んで分析しても、うまくいかないと思います。分析しても後には何も残らない。それより、分からないものを分からないものとして受け止めることが社会の成熟には重要です。ただ唯一分かることは、誰でもニートになる可能性があるということです。

東京大学社会科学研究所助教授

### 玄田 有史(げんだ ゆうじ)

1964年 島根県生まれ。1988年 東京大学経済学部卒業。1992年 同大学院経済学研究科退学後、ハーバード大学、オックスフォード大学各客員研究員、学習院大学教授などを経て、2002年 東京大学社会科学研究所助教授(現職)。専攻は労働経済学、マクロ経済学。著書に『ニート・フリーターでもなく失業者でもなく』(共著/幻冬舎・2004)、『ジョブ・クリエイション』(日本経済新聞社・2004)、『仕事のなかの曖昧な不安:揺れる若年の現在』(中央公論新社・2001)などがある。

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

[h-bunka@lec-jp.com](mailto:h-bunka@lec-jp.com)